
随 想



Balance

辻 畑 敬 治*

我々の住む世界を仏教では俗世と呼んでいる。俗世も生き方では楽しくもなり、苦しくもなる。人類発達の歴史を顧みるに、いずこかの土地において、あるいは国の内外、社会の内外、会社、家庭の内外において、何らかの争いがその跡をたたない。これらは、要するに、何らかの Unbalance に起因しているものであると考えられる。

住みにくいといつても、今すぐ出ていく世界があるわけではなく、グチをこぼしたとて良くなるものでもない。そこで住みにくい世界を少しでも楽しくするために宗教が生れ、芸術が生れ、詩が生れてきたものであろう。世界の平和を願つて国連が生れたこともよくわかる。つまり人類の Balance を願い、平和を祈る気持はいつの時代も同じなのである。富士山を見ては美しいと思ひ、美人を見ては勿論、うるわしいと感ずることであろう。すなわち、調和のとれたものに我々は安定を覚え、美を味得するのである。我が国の今日までの長い歴史を顧みるに、それは先進諸国の後を追ひ、文明技術を吸収し、同化することによつて、その遅れをとり戻そうとする努力をたゆみなくつづけてきたといえる。西欧の物質文明は産業革命以後、一大躍進を遂げたが、我が国は当時徳川幕府の鎖国政策で海外との交流がほとんどなくなり、海外文化の吸収は弱まり、江戸文化の花を開かせ、低位の Balance を保ちつつ平和の生活をつづけたのである。その結果、西欧との開きはまたもや大きくなつた。明治維新はより高度な Balance の世界に進まんとする努力の時代といえる。

さらに、大正、昭和に至り、欧米との往来は高速化され、新技術、新製品は速かに導入されるようになった。そして、国を挙げての努力により、先進諸国との差は縮まりつつあつたが、第2次大戦で人的物的に一大打撃をうけたため、ほとんど壊滅に近い状態となつたのである。しかしながら、日本人の勤勉さはやはり根強く残されており、これをうまく活用することによつて、わずか20年にして驚異的復興発展をもたらしたのは誠に喜ぶべきことであろう。今や造船は世界第1位、合成繊維は第2位、鉄鋼は第3位、セメントは第4位と著しい発展を示し、自動車等もモータリゼーションの発達と共に上位にランクされる時代となつた。すなわち、これらは高度の Balance を保ちつつ、発展をつづけているので

* 本会常務委員 八幡製鉄株式会社取締役 工博

ある。しかし、総合して技術の輸出入 Balance をみるに輸入の方がはるかに高率を示しており、今後はこの差を縮めること、換言すれば技術輸出率を高めることに力を注ぐべきであろう。ここに日本の繁栄の道があるのである。

創意を働かせるところに技術開発があり、技術開発のあるところに資源は門戸を開く、といえる。我が国の通念として資源の乏しきを憂う人が多いが、綿成品にしろ、鉄にしろ、船、自動車にしてもいわゆる原料的資源は誠にさみしいものであるといえる。しかるに、これらの産業が世界市場において競争力をもつたこと、またはもちつつ伸びていることは日本民族の精進の結果であろう。鉄鋼業も量的には世界の第3位、質的にもかなりのレベルに達してきた。そして今や今後の発展を期して量的には数年後に 8,000万 t になることも予想されている。それもまことに結構な話である。

ここで、若干飛躍した考えかもしれないが、材質が新技術の開発により、さらに向上し、5,000 万 t で 8,000万 t、8,000万 t で 12,000万 t の役目を果たすることができるとしたら、資源は拡大したことを意味し経済的にも世界市場にのびることになる。これまた喜ばしい現象といえる。それがためには新技術開発に国をあげて力を注ぎ、強力な協力体制を作ることが望まれるところである。現在では日本に生れた優れた Idea を育成する環境が未完成であり、ひたすら外国のものをよいと考える間違つた因習が根強く残っていることは残念なことである。すなわち、何らかの Unbalance のしからしめる結果であろうと思うのである。不幸はすべて Unbalance から生まれるといえよう。

最も我々の身近かな問題として安全運動がある。“怪我”—これは全く身心の Unbalance から起こると考えられる。工場において人的災害の発生ほど不幸なことはない。工場で働く人々は人生の大部分を工場で過ごすのであるから、その職場を楽しいものとするのが第一である。すなわち、整理、整頓を徹底的にすることから始まり、表だけの整理は駄目で、裏の裏までみんなの手できれいにすることが大切である。あるいは家庭に呼びかけて家族の協力を求め、強力に安全運動を推進するのも良い方法であろう。先づ第一に“やってみる”こと、そして“やればできる”と自信をもつこと、次に“忠実に実行する”ことである。個人個人が努力して自覚するようになれば大体安全運動は軌道にのるものである。安全成績が向上すれば生産能率は必ず上昇し、そこでみんなが日々を楽しみながら生産に励むことができるのである。

会社の経営を例にとれば、財務、営業、技術を3つの Base とし、これが重心に立つ管理によつて Balance を保つてこそ、うまく運営されるものである。わかり易くするために三角錐体を頭に描けば理解が速いはずである。タコに例をとると、タコは親糸を中心に数本の吊糸が Balance して始めて空高く昇るのである。企業経営においても全く同様であろう。

さらに、企業間の協調も Balance Theory でその必要性はよくわかる。それなのに真の協調が難かしいようでは企業の真の発展は期待しにくいであろう。

聖徳太子の“和を以て尊しと為す”の精神をお互にもちあつて進むことが大切ではなからうか。